青春の門

第七部　挑戦篇　上

五木寛之

講談社

青春の門　第七部　挑戦篇　上

著　者　五木寛之

発行者　野間佐和子

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　〒一一二―〇一
電話　編集部（〇三）五三九五―三五〇五
販売部（〇三）五三九五―三六二二
製作部（〇三）五三九五―三六一五

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　株式会社大進堂

第一刷発行　平成五年六月三十日

©五木寛之　一九九三年　定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-205638-0　（文2）　Printed in Japan

風　5
女　9
れて　31
の忠告　76
の幕あき　100
123
145
167
187

過去を償うとき　208
闇をのがれて　231
ベードヌイエ・リュージ　254
聖母の乳房　265
春まだ遠く　287
ラザロの肖像　308
織江の匂い　340
函館の街で　352

題字　桑原江南
装幀　表紙絵　さしえ　奥村靱正

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青春の門

挑戦篇　上

プロローグ

江差(えさし)は風の街である。

季節によっては、北海道でも最もつよい風が吹くという。

秋がすぎ、冬が到来するころ、この街には異様な風が吹きはじめる。漁師たちが俗に、

〈タバ風〉

と呼ぶ、北西、または北北西からの強烈な海風である。

このタバ風はただの風ではない。目に見えぬはげしい風圧の塊が束(たば)になって、力士の張り手のようにどっと叩きつけてくるのだ。その迫力はいちど体験した者でなければわからない。

風は海のほうから吹く。

江差はその日本海をへだてて、はるかかなたのシベリア大陸にむかいあう街だ。市街は波打際から次第にせりあがる山裾の斜面にある。そのために海からの風は正面の街並みに激突し、坂道を逆流する。

風は樹々をゆさぶり、家々の屋根をふるわせ、人びとの眠りをおびやかす。集団で行動するカラスたちも、このタバ風が吹くと、地上におり、嘴をさげ、身を伏せるほどだという。

十一月にはいると、雪もやってくる。だがそれは、音もなくしんしんと降りつむ雪ではない。

江差の雪は横に飛ぶ。

この街に意外に積雪がすくないのは、その風のはげしさのせいだろう。根雪になるまえに、吹き飛ばされてしまうからである。

しかし地元の人々がそんなふうに江差の風のつよさを情熱的に語るのは、決して誇張ではないようだ。

〈江差の冬の風は古来、全道一を誇っている〉

と、郷土史家、小林優幸氏はその著書のなかで書いている。

すなわち、

〈測候所の記録によれば、年間の平均風速ではわずかに寿都にゆずるとしても、十一月から三月までの冬期間、最大風速一〇メートルを超える日数の比較では圧倒的に江差に軍配があが

る〉

小林氏はさらにそのあとにつづけて、

〈江差の風は全道で最も強く、強風地として知られる稚内や留萌地方よりも暴風日数が多いのである〉

と、自信にみちた筆致でのべている。（菅江真澄と江差浜街道／みやま書房）

その全道随一の風の街のなかでも、さらに群をぬいてつよい風の吹く場所があるらしい。

〈鷗島〉

が、それだ。

江差追分の唄にもうたわれ、芭蕉も一度は訪れたいとねがったといわれる有名な島だが、この鷗島のタバ風こそ全国一の烈風だというのである。

鷗島は江差の街の正面にうかぶ台地状の島である。かつて江差が北前船の北端の基地として信じられないほどの繁栄を誇りえたのは、この島あってのことだった。

左右に翼をひろげたようなこの島が、天然の良港としてニシン漁や交易の舞台となったことは、現在ではもう遠い伝説のように語られるだけだ。

以前は船でわたるしかなかったこの島も、昭和四年に築港が完成して、島の台地まで徒歩で登ることができるようになった。

海抜二〇メートル、周囲二・六キロの鷗島は、いまは〈かもめ島〉として若者たちのキャンプや、フィッシングにも親しまれている。だが、冬、タバ風の吹く季節にこの島をおとずれる

物好きな客は、ほとんどない。

雲が低くたれこめ、波が兇暴にふきあげる日没寸前の時間に、〈くずれ〉とよばれる台地の突端ちかくに立つには、かなりの勇気を必要とするだろう。

タバ風は吹きすさぶだけでなく、一瞬、ふっと不意にやむ場合がある。また、ときには呼吸するかのように逆に引いたりもする。崖に立つ人が風に逆って無意識に前傾姿勢をとっていると、その瞬間、目の下の海中に吸いよせられそうになることもある。

かつては弁天島と呼ばれ、一説には古代からアイヌの人々のカムイ（神威）の島であったともいわれるこの島には、いまも一種の重い霊気のようなものが立ちこめているようだ。

それを感じたければ、冬、それも夕バ風の吹きすさぶ夕暮れに、ひとりで島を歩いてみるといい。

島の中央部のほそくくびれた肩部に立って、なにも考えずに、自分の息を風の呼吸にかさねあわせてみるがいい。

北西からの風に体が浮きあがりそうになったら、そのとき自分を風に乗る一羽の鷗のように感じて、思わず大声で叫びたくなるだろう。

この日本列島でもっともつよい風を体験する機会など、冬の江差をのぞいては、そうざらにはないのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かもめ島の風

一九六〇年が終わろうとしていた。

昭和三十五年の冬のことである。

江差の街には、一年前の大ヒット曲、水原弘がうたう〈黒い花びら〉の歌声が風にちぎれながら流れていた。一九六〇年は〈黒〉がブームの基調だった。

いわゆる六〇年安保、すなわち日米安全保障条約をめぐって、戦後最大といっていい国民の抗議デモが連日のように国会をとりまいた年である。

日米安保強行採決。

学生たちの反対運動の激化によるアメリカ大統領の訪日中止。
三井三池炭鉱の流血の大争議。
山谷の労働者暴動。
浅沼社会党委員長の刺殺事件。
ざっとひろっただけでも、一九六〇年という年がどれほど激烈な季節であったかがわかる。
〈黒〉が時代の色としてもてはやされたのは、そんなどす黒い世相の反映かもしれない。人々の心情の底に、たぶん〈黒〉に敏感に反応するなにかが存在したのだろう。
〈黒い画集〉や〈黒いオルフェ〉などの映画が話題をあつめたのがこの年だ。どこか不逞な風貌の新人歌手、水原弘のハスキーな歌声にもどす黒い虚無感があった。いっぽう西田佐知子は、無表情に〈アカシアの雨が止む時〉をうたいつづける。
五〇年代という、ひとつの季節が終ろうとしていた。そしてすぐ目の前に、未知の時代が不気味によこたわっていた。
人々は薄明のなかにかすかにうかぶ巨大な時代に目をこらす。
六〇年代という新しい時代。
それはいったい、どういう時代なのか。
なにが終り、今度は一体なにがはじまるのか。
嵐の前の一瞬の静けさのような空白が、歳末の日本列島をおおっていた。
そして〈黒い花びら〉の歌声の裏側を追いやるように、その年のヒット曲〈誰よりも君を愛

す〉の濡れたコーラスが江差の街にも流れはじめている。

その一九六〇年、昭和三十五年の十二月下旬のことだった。

江差の繁華街である新地通りの一角を、一人の青年が歩いていた。

つよい風は坂道をまくりあげるように吹く。街にはすでに、たそがれの気配がただよいはじめている。人々はみな顔をそむけあって歩いていた。そんな中を、彼はあたりをうかがうように目をくばりながら、坂をゆっくりとのぼってゆく。

カーキ色の米軍放出コートをはおったその青年が、突然、すれちがった男に大声でたずねた。

「やすべえ、という店はどこですか」

きかれた男はぶあいそうに、無言のまま肘(ひじ)で左手のほうをさした。

「ここを曲がるんですね」

青年がふり返って礼を言おうとしたときには、もう相手の姿はなかった。

青年は肩をすくめて歩きだした。この季節には似つかわしくないくたびれたジーンズをはき、マフラーで顔の半分をかくしている。長髪が風にさかまいてはげしくなびく。

キャンバス地の重そうなショルダー・バッグをひとゆすりすると、青年は立ちどまった。

繁華街からすこしはいった通りに面して、一軒の喫茶店があった。〈ボナール〉というちょ

っと洒落(しゃれ)た看板がかかっている店だ。
店の中はいかにも暖かそうに見える。青年は白くくもったガラス窓に顔をおしつけるようにして、店内をのぞきこんだ。
どうやらその店にはいろうかどうしようかと、迷っているらしい。彼はコートのポケットをさぐり、すこし考えてから頭をふった。
やがて青年はあきらめたように、その喫茶店の前をはなれた。そしてコートの内ポケットから小さな紙片をとり出すと、それをたしかめるように眺めた。それから、顔をあげて周囲を見まわした。彼はすぐ目の前の一軒の店に目をやった。
「なんだ、こんなところにあったのか――」
と、彼は苦笑してつぶやいた。それから店ののれんの文字を声にだして読んだ。
「やきとり、ラーメンの店、やすべえ、か」
それは木造の目立たない建物で、見るからに古びたかんじの飲食店である。道をへだててむかいあっている喫茶店〈ボナール〉とは、対照的な雰囲気だ。
青年はショルダーバッグをひとゆすりすると、その店にはいっていった。
「こんにちは」
青年はうす暗い店の中をたしかめるように眺めながら、せまいカウンターの端に腰をおろした。ほかに客の姿はない。
奥から中年の婦人が姿を見せて、いらっしゃい、と、低い声で言った。

「やすべえ、っていう店はここですよね」
青年はコートを脱ぎながらきいた。
「やすべえはここだけど」
と、婦人が無愛想に答えた。
「よかった」
青年は安心したようにうなずくと、
「この店のご主人は、いま、おられますか」
「いまはいないよ」
「そうですか」
婦人の催促するような表情に青年はうなずいて、
「じゃ、ラーメンください」
「ラーメンね」
店の奥のほうでラジオの音楽がきこえていた。この店の時代がかった雰囲気には似つかわしくないラテン・リズムの曲だ。

〜　コラソン・デ・メロン

と、若い娘の声がくり返しうたっている。森山加代子というアイドル歌手の声だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com